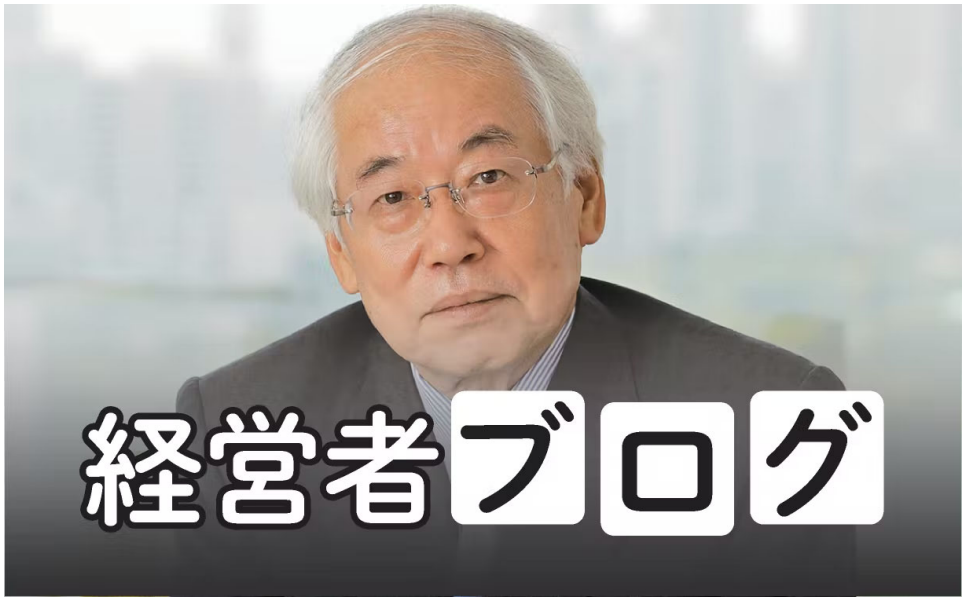
ウクライナの悲劇、日本に居ると

経営者ブログ　鈴木幸一　IIJ会長

2022/3/15 2:00 | 日本経済新聞　電子版



努力をしない限り、才能は爆発しない。才能がないと努力はできない。どっちも当たっている。私は、いずれにしても、眠りを忘れるほどの努力に駆り立てる才能に欠けていたのだ。なにより、怠惰に日を送る誘惑に負け続けたまま、老いを迎えてしまったのである。

■「東京・春・音楽祭」が始まる

今週の金曜日から、18年目を迎える「東京・春・音楽祭」が始まる。初日に演奏をしていただく、指揮者のリッカルド・ムーティさんが来日し、食事をする機会が多くなると、その準備、勉強時間の長さ、楽譜を濃密に読み込む姿に、改めて感嘆する。

ウメ

「今日は朝からずっと勉強してしまった」。夜、食事の場所で待ち合わせると、疲れ切った表情で目をこするのだが、食事が始まると、すぐに若々しくチャーミングな表情になって、冗談しか交わせない私に合わせて、楽しく食事をする。

「東京・春・音楽祭」は私にとっては、あくまで生涯をかけた道楽なのだが、ロシアのウクライナへの侵攻が激しさを増す悲劇的な映像を目にしていたら、ふと、この音楽祭を始める動機のひとつとなった、ソ連に実質的に支配されていた時代のプラハを思い出した。

プーチン氏と親しかったロシア人指揮者のワレリー・ゲルギエフ氏をはじめ、ロシアの才能にあふれた演奏家が、世界中でそのポジションを解任、あるいは辞職された。演奏家も自らその演奏活動を当分の間、中断する旨を表明している。演奏会そのものの中止は、世界中の演奏会場で起きている。

■ロシア音楽を演奏しないと宣言

260万人以上のウクライナの人びとが、戦争から逃れて国を後にしているとされる。最も多くのウクライナの人びとが逃げ込んでいる隣国のポーランドでは、先週、チャイコフスキーをはじめとするロシア音楽そのものを演奏しないと宣言している。「いくらなんでも、そこまで」と思うのだが、ソ連には長年、煮え湯を飲まされるような過酷な歴史を繰り返してきたポーランドにおいては、そんな決定も納得されるのだろう。

ホソバウンラン

第2次世界大戦後、鉄のカーテンと言われたように、ソ連による東欧への過酷な統制は「ハンガリー動乱」「プラハの春」を経て、ベルリンの壁の崩壊まで続いた。ソ連の実質的な支配下にあった時代、何度かハンガリーやチェコスロバキア（当時）など、東欧の国々を訪れる機会があった。今週、ようやく始まる「東京・春・音楽祭」を始めた動機も、暗い時代のプラハの鮮烈な記憶がきっかけだったともいえる。

アレクサンデル・ドプチェク氏の自由化、民主化運動の「プラハの春」を崩壊させるために、ソ連の戦車が並んだというバーツラフ広場のカフェで、冬、寒々しい灰色の街路を眺めながら、暗く落ち込んだ気分のまま、コーヒーを飲んでいた時に、「いつか」と思い込んだのだった。

当時のプラハを覆っていた暗さは、ミラン・クンデラの小説を読むと、その重苦しさがすぐに伝わるのだが、私はバーツラフ広場に重苦しく漂う灰色の大気に閉じ込められて、身動きができないまま、与えられた仕事をこなしていただけだった。

■「わが祖国」に始まる音楽祭

「明後日、日本に戻ります」「なに言っているの、今週から音楽祭が始まるのよ。せめて2、3日は居続けなさい」。いろいろとお世話になっていた方に勧められたのが、プラハが唯一、誇れるイベントだと言う「プラハの春」音楽祭だった。冒頭、スメタナ作曲の「わが祖国」に始まる音楽祭である。

アンズ

いつか、どんなに暗い時代にあっても、街の人々が心から誇れるこのような音楽祭をやれたら。以来、そんな思いを長いこと胸に秘めていたのだが、20年ほど前に指揮者の小澤征爾さん、演出家の浅利慶太さんと食事をする機会があった。「鈴木さんの思いを実現すべきである」「協力するから」となって、音楽関係の公演などまったくの素人の私が始めることになった。

音楽祭との関わりは実質、準備期間を入れると20年以上にもなる。毎年、夏休みになると欧州の音楽祭に出かけては、音楽家や音楽関係者と知り合いになって「東京・春・音楽祭」の輪が広がり、なんとか世界でも評価されるような音楽祭になってきたようだ。

「『音楽を武器にして、世界中の戦争を止めたい』。北と南に分断された故郷で紛争が起きるたび、ゲルギエフ氏は人道支援を呼びかけ、力強くこう口にした。ロシアの攻撃によってウクライナの無辜（むこ）の民が血を流している状況を、ゲルギエフ氏もまた、複雑な思いで見守っているかもしれない。率直な思いの表明はいまだになされていない」

こんな記事があった。日本の音楽関係者は、ロシアの演奏家に同情しているようだ。この時期、ゲルギエフ氏にこれだけのシンパシーを表に出した文章は、世界的にもあまりない。音楽や音楽家への思い入れがそれだけ強いのはわかるのだが、「ウクライナの無辜の民が」という言葉が、とってつけたような印象になっている。

■ロシア指揮者が「わが祖国」を指揮したら

別の記事ではこの時期、日本で「わが祖国」を指揮したロシアのミハイル・プレトニョフ氏の演奏を「生きとし生けるすべてのものを謙虚に賛美する、新たな生命を得た『わが祖国』であった」と絶賛している。ピアニストであり指揮者であるプレトニョフ氏は、圧倒的な才能で聴衆を魅了する音楽家である。

2010年に少年に対する性的暴行容疑が明らかになって以来、欧州では演奏の機会も少ないのだが、音楽に対する評価は変わらない。東京での演奏も素晴らしかったに違いないのだが、スメタナが生きていたら、ロシアがウクライナへの侵攻を拡大しているこの時期に、ロシアの指揮者が「わが祖国」を指揮したら、どんな思いがするのだろうかと、ふと考える。

ソ連がプラハに進駐、バーツラフ広場に弾圧の戦車を並べ、ボヘミアに対し厳しい統制で締め付けながら、「わが祖国」の指揮者にソ連の指揮者を招くことは、あり得ないのではないか。私の思考は音楽の才能、演奏がすべてとはいかない。

「プーチン皇帝は、究極的な合理主義者で計算高い。彼は狂っているのではなくて、邪悪なのだ」（ニーアル・ファーガソン）

ロシアの攻撃は過激化するばかり、シリアから兵士を増強するとの話もある。言うまでもなく、東欧とウクライナとは隣接した地域であり、戦後、長い時間軸でソ連の過酷な統制下にあった国々である。これから、どれだけのウクライナの人々が悲惨な状況の下、祖国を逃れ、生命を奪われようとしているのだろうか。

【関連記事】

・一方的な情報統制の恐怖

・西側諸国とかけ離れてしまったプーチン氏の世界観

本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は、日本経済新聞社またはその情報提供者に帰属します。また、本サービスに掲載の記事・写真等の無断複製・転載を禁じます。

Nikkei Inc. No reproduction without permission.